

八王子学園都市大学 10 年の軌跡

— 大学と地域の融合を目指して —

八王子学園都市大学学長 青山 侑

はじめに

八王子学園都市大学（愛称「いちょう塾」）は 2004（平成 16）年 9 月に開学し、2014（平成 26）年秋に 10 周年を迎えた。

八王子市は周辺部を含め 23 の大学、短期大学、高等専門学校を擁し、立地する大学の数では日本のみならず、世界でも有数の学園都市であろう。この地域特性を生かし、市民に高度な学習の場を提供するなど大学と地域の融合を図る目的で、八王子学園都市大学が発足した。

多くの自治体が設置する一般の市民大学とは一味違った大学を目指したわけだが、当初は手さぐりで開始し、実際に講座を実施しながら毎年のように微調整を繰り返し、今日、ようやくそれなりに安定期を迎えた感がある。

この 10 年間、すなわち平成 16 年度後期から平成 26 年度前期までの延べ講座数は 2565 講座、延べ登録者数は 6795 人、延べ受講者数は 6 万 1987 人に上り、多くの市民に親しまれてきた。

10 周年を迎えたこの機に、八王子学園都市大学の 10 年の軌跡を振り返ってみたい。

1. 開学までの経緯

（1）開学に至る背景—多くの大学等が八王子に立地

1959（昭和 34）年にできた「首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律」は、「既成市街地への産業及び人口の過度の集中を防止するため」、「工業等制限区域」（具体的には 23 区と武蔵野、三鷹市）に対して工場及び大学等の新設及び増設を制限した。この法律で「学校」とは、大学、高等専門学校、専修学校、及び各種学校を指す。

この法律は 2002（平成 14）年に廃止されたが、それまでの学生数増加期に多くの大学が新規校舎増築のため郊外に立地場所を求めた。広大な市域を有し、多摩及び近隣各県間の交通ネットワークの結節する八王子市に多くの大学等が立地したのは、いわば自然の流れでもあった。

この流れと並行して、人々の間に生涯学習（lifelong learning）への志向が高まっていった。1981（昭和 56）年の中央教育審議会答申「生涯教育について」は、生涯学習を「人々が自己の充実・啓蒙や生活の向上のために、自発的意思に基づいて行うことを基本とし、必要に応じて自己に適した手段・方法を自ら選んで、生涯を通じて行う学習」と説明している。

生涯学習は、市民の側が科目等を選択する点に特徴があるが、八王子にせつかく多数の大学等が立地しているのだから、これを活用すべきという方向に向かったのは、これもまた自然の流れであった。

八王子市では、1977（昭和 52）年という早い時期に学園都市協議会が設立、行政・企業・住民の間に学園都市づくりの機運が高まり、行政が中心となって大学との結びつきを強め、学園都市づくりがスタートした。八王子市を活力溢れる真の学園都市にしようと、市民、大学、企業、行政が一体となったユニークな活動が既に成立していた。その後、1980（昭和 55）年には

市民を中心として学園都市推進会議が発足し、現在も八王子市の学園都市づくりの政策について議論し、大学、学生、市民、企業、行政等の連携や各種交流事業を積極的に推進している。

東京都でも 2001（平成 13）年に策定した『八王子・立川・多摩業務核都市基本構想』の中で「八王子市では、学園都市センターを始めとする大学・学生と市民との交流の場を生かし、街に若い活気がみなぎるようなまちづくりやイベントづくりを進める」と八王子市の取組みを積極的に支持している。

（２）市民大学設立の検討

以上のような市民と大学の連携に向けた機運が高まる中で、八王子市は 2003（平成 15）年 1 月に「（仮称）八王子市民大学検討委員会」を設置した。

この検討委員会は市民委員 4 名と大学等から選出された 24 名の委員からなり、これに八王子市から 2 名、（財）八王子市学園都市文化ふれあい財団（以下、「ふれあい財団」という）から 2 名の幹部職員が参加した。市民委員は八王子市の生涯学習推進計画策定検討委員及び元生涯学習推進懇談会委員及び上記学園都市推進会議の会長・副会長が参加した。

委員の大半は大学側委員であり、市民大学設立や各大学からの委員選出にあたっては、当時、大学と市の連絡・調整を担っていた学園都市連絡会の存在があった。各大学の積極的参加なしには成立しないという関係者の問題意識がここに鮮明に表れている。

検討委員会は 2003（平成 15）年 8 月まで検討を重ねた。この間、大学選出委員会、ワーキング部会、実務者検討会など各種の会議を重ねている。これらの検討の結果は後述する「開学の方針」に反映された。

検討結果の基本事項は、「キャンパスは八王子市学園都市センター（八王子スクエアビル）及び各大学」、「受講資格は原則 18 歳以上で、大学レベルの講義に関して学習意欲のある方、八王子市民以外も可」、「講座選考は、大学正規科目は開設大学で、それ以外は市民大学事務局で行う」とした。また、受講科目の実績に応じて市民団体としての学位を授与することとされた。

そして市民大学の名称については、市民が愛着を持てるよう、正式名称と別に愛称を広く市民から募集した。当初は正式名称を「八王子市民大学」と決め、愛称のみを募集したものであったが、選考の過程で複数の市民から「学園都市大学」の名称が挙げられ、これは八王子の都市としての基本的な性格についての従来からの考え方にも合致していることから、のちに正式名称についても「八王子市民大学」から「八王子学園都市大学」に変更されることになった。

愛称募集は、「広報はちおうじ」2004（平成 16）年 4 月 1 日号で周知され、応募名称 140 作品の中から、①市民に親しまれる名称 ②市民大学のイメージ ③学習意欲の高揚という観点から選考委員会にて検討した結果、「いちよう塾」に決定した。これは、八王子市みついで台在住の当時 69 歳の女性の作品である。

2. 開学した市民大学の概要

開学は 2004（平成 16）年 6 月 1 日に決定し、大学の目的は以下の 4 項目とされた。

- ・地域の大学と連携して専門的で高度な学習の場を市民に提供する。
- ・大学単位取得や資格取得の手助けとなる場を市民に提供する。
- ・大学の高度な教育を通して人材育成を図り、もって、まちの活性化をはかる。
- ・市民が大学をより身近に感じられる学園都市をめざす。

そして、大学の正式名称は「八王子学園都市大学」、愛称は「いちょう塾」とし、開学は2004（平成16）年9月1日と決定された。

受講費用は講義回数1～3回は2000円、4～7回は4500円、8～11回は7500円、12～15回は1万1000円とし、運営はそれまでも八王子の学園都市づくりの一翼を担ってきたふれあい財団へ委託することが決定された。このときの予算は、歳出で委託料として1892万円など計2570万円、歳入は講座受講料400万円である。

開学の前日の2004（平成16）年8月31日、いちょうホール（大ホール）で開学式典及び開学記念トークショーが行われた。黒須隆一市長（当時）及び学長の挨拶、来賓の祝辞のあと、映画監督の齋藤耕一氏が25年前に八王子の町並みをモチーフに撮影した「わが街の詩」を上映するとともに、本市出身でNHKテレビ「きょうの料理」などを担当していた村松真貴子さんを招いて、子どものころの思い出を踏まえながら、斉藤監督と八王子の遷り変りとこれからの学園都市づくりをテーマにトークショーを開催した。



開学記念式典の様子（学園都市大学事務局より提供）

3. 開学から10年間の講座実施状況

10年間の講座の実施状況は図表1のとおりである。この図表で「学園都市センター」とあるのは、JR八王子駅北口前の八王子スクエアビル11階・12階の八王子市学園都市センターを会場として実施した講座であり、「キャンパス（公開科目）」とあるのは、各大学のキャンパスで学生を対象に実施する授業を八王子学園都市大学の生徒に公開したものである。「キャンパス（特設科目）」は、各大学が八王子学園都市大学の生徒に対して特設した科目のことをいう。「その他」はクリエイトホール等の他施設を会場として実施した講座を指す。「公開講座」は、原則として一回限りの講演会的なもので、無料であり、かつ受講するために申込等の手続きは必要ないものである。

小計欄の講座数（公開講座を除く）を見ると、10年間にわたって毎年ほぼ200講座と一定している。これは、各大学が八王子学園都市大学に対して継続して協力し講座を提供していることを意味する。また、公開講座を除く講座の受講者数も毎年1000人程度で一定しており、内容的にも毎年継続して受講者が集まっていることを示している。

図表 1 学園都市大学 講座・受講者数の推移（平成 26 年 10 月 31 日現在）

	学園都市センター		キャンパス（公開科目）		キャンパス（特設科目）		その他		小計		公開講座		合計	
	講座数	受講者数	講座数	受講者数	講座数	受講者数	講座数	受講者数	講座数	受講者数	講座数	受講者数	講座数	受講者数
平成 16 年度	25	709	21	28	4	56	2	56	52	849	17	1,238	69	2,087
平成 17 年度	51	974	66	171	5	63	2	26	124	1,234	40	2,995	164	4,229
平成 18 年度	70	1,607	97	205	5	55	3	39	175	1,906	42	3,582	217	5,488
平成 19 年度	96	1,876	93	187	12	100	3	62	204	2,225	48	4,731	252	6,956
平成 20 年度	106	2,059	93	162	20	203	4	45	223	2,469	64	4,622	287	7,091
平成 21 年度	95	2,013	97	187	18	168	8	75	218	2,443	65	5,777	283	8,220
平成 22 年度	99	1,892	97	208	22	221	7	72	225	2,393	65	5,311	290	7,704
平成 23 年度	90	1,829	101	192	22	222	7	62	220	2,301	64	4,809	284	7,110
平成 24 年度	125	2,114	96	218	26	373	5	52	252	2,757	60	2,737	312	5,494
平成 25 年度	108	1,964	99	193	15	217	5	52	227	2,426	53	2,477	280	4,903
平成 26 年度	106	1,929	88	171	16	155	5	43	215	2,298	69	2,615	284	4,913

※開講講座数＝講座数－中止講座数

※受講者数＝受講予定人数＋単位互換学生数－中止講座申込者数

※平成 26 年度の受講者数は未確定

出典：学園都市大学事務局資料より筆者作成

10 年間にわたって一定の講座数と受講者数を維持しているということは、大学側からも市民の側からも学園都市大学の事業が一定の支持を得ていると考えられるが、その要因としては、内容的に一般の市民大学やカルチャーセンターと違い、23 の大学等が参加協力して高度かつ専門的な講座を提供していること、そして八王子ならではの特徴ある講座を提供していることの両面からの独自性が評価されていると考えられる。

この点について具体的に 2014（平成 26）年度の特色ある講座を例示すると、次のようなものがある。

【前期講座】（数字は講座番号）

- ・ 4－17 和食の美味しい技（提供機関：ふるさとの食を拓く会）：八王子地域の 23 大学以外の協力機関から提供される講座であり、器の選び方、盛り付け方、素材の切り方等を学び、和食の美しさとしり方の知恵や技術の習得を目標とする講座。
- ・ 4－70 ワークショップ・シルクスクリーン（提供機関：多摩美術大学）：ワークショップにおいて広くシルクスクリーンの技術を習得することを目標とする講座であり、大学の正規講座を受講するもので、当該大学が単位を認定することにより、単位を修得する講座。
- ・ 4－79 総合科目特講 b 八王子学～八王子の過去と今を知って、世界の未来を考えよう～（提供機関：創価大学）：八王子の過去と未来を知り、八王子と世界の未来について考えることを主題とする講座であり、各界で活躍される第一級の“八王子通”の方々を毎回の講師として講義を行い、授業外の課題として、講義で取り上げられた場所にできるだけ多く足を運んでもらう講座。大学の正規講座を受講するもので、当該大学が単位を認定することにより、単位を修得することも可能な講座。

【後期講座】

- ・ 9－41 アジア塾 ～次の時代は東南アジア～（提供機関：拓殖大学）：全 10 回の講座を、毎回異なる講師により講義が行われるオムニバス形式で実施される講座であり、当該大学のみならず、企業で活躍される方も講師に含まれる講座。
- ・ 11－11 多摩と八王子の江戸時代 ～地域の歴史と文化遺産を探る～（提供機関：法政大学）：地域の魅力や可能性を知り、郷土への“愛着”や“誇り”を感じていただけるよう、八王子周

辺地域の歴史、民俗、自然などを学びの対象とする地域学講座の一つで、2011（平成 23）年から連続して開講している講座。



開講講座の様子（学園都市大学事務局より提供）

4. 講座以外の実施状況

（１）学生と市長のふれあいトーク

八王子学園都市大学では毎年、各大学のゼミナール生からの八王子市政に対する提案を募り、代表的な作品について、市長と学園都市大学の評議員（審査委員）の前で提案内容を八王子市学園都市センターイベントホールで実施する「学生と市長のふれあいトーク」のなかで発表してもらって市長からコメントするほか、優秀賞等の授与を行っている。

提案の中には、図表 2 に示すように実際に市政に取り入れられたものも多い。

図表 2 学生発表会「市政提案部門」「学生と市長とのふれあいトーク」実現化内容一覧

	大学名	テーマ	概要	実現化内容
平成 18 年度	杏林大学	大学生の HIV/AIDS に関する意識の実体の把握	HIV やエイズの正しい知識を提供し健康的な学園都市八王子にするために調査を実施した。	★学生天国★にて、ブースを出して HIV に関する情報発信の実施。
	創価大学	学生の行動範囲でみる八王子の調査研究	新入生向き情報誌＋通行手形の作成。みやげ屋（市内の大学特製グッズ、八王子の名物、学生がデザインしたグッズ）。大学めぐりバス。春のキャンパスめぐり	平成 19 年度新入生向け情報誌「BIGWEST」作成に、学生の意見を反映。
	多摩美術大学	水の恵みをうけるまちづくり 湧水ネックレス構想実現に向けて	8 箇所の湧水の周辺に、それぞれの拠点（サテライト）を設置。8 つのサテライトを結ぶコアを作りインフォメーションや各種サービスを実施。	湧水マップの作成
	東京造形大学	都市防災とデザイン	「防災情報入りごみ袋」、「ランドマークバルーンの説明」、「ご当地カンパン」、「ダンボール簡易トイレ」、「地下道のランドマーク」	ごみ袋への防災情報の掲載
平成 19 年度	東京造形大学	H a c h i o j i 影絵プロジェクト	伝統的な産物「写し絵」を甦らせ、今に再現するために調査、製作。	郷土資料館にて影絵のワークショップを開催。
	杏林大学	八王子市を若者が「集う」街にするために～「デート」の視点から～	八王子市を舞台としたデートコースの提案①登山デート ②学食デート ③サイクリングデート ④ショッピングデート ⑤ロケ地巡りデート ⑥散歩デート	新入生向け情報誌「BIGWEST」に、学生が取材した八王子のおすすめスポット情報を掲載。
	拓殖大学	防犯と景観に優れたまちづくりの提案 ～八王子市の住宅街をモデルケースとして～	まち区公園をモデルケースとして、防犯面、安全面、景観面の 3 つの視点を統合し、高齢者、小中学生、幼児に特化した公園を提案	平成 20 年 3 月の都市景観セミナーにて研究成果を発表。
	東京工科大学	八王子市民の電子広場＆電子ギャラリー	情報交換や交流できる場所仕組みとして、電子ネットワーク上に「電子広場＆電子ギャラリー」を構築。	提案を受け、市民による Web サイト「ハチボ」の運営が開始。

平成 20 年度	創価大学	生産者に思いを寄せる最先端のまち、八王子	食品の生産者の思いを伝える手段として、小学生の教育で利用できる授業の教材や仕方を提案	児童向け、食育パンフレット（副読本）を制作
平成 21 年度	創価大学	資源循環型社会をつくる学生のまち‘八王子’	資源循環型社会を目指し、レアメタル回収を促進するため、大学対抗レアメタル回収コンテストの開催など、小型家電の回収システムの確立を提言。	地域 23 大学に呼びかけ、レアメタル回収コンテストを実施（いちょう祭りで表彰式を実施）
平成 22 年度	創価女子短期大学	世代を越えて心がふれあうモデル都市、八王子	一人暮らし高齢者が学生と共に食事を作って食べる交流会を団地で定期的に開催することを提案。	館ヶ丘団地内に地域住民の高齢者見守り活動や、1人暮らしや孤立した高齢者を把握し、支援する「シルバーふらっと相談室」を設置
	創価女子短期大学	ハチさんの知恵袋	一人暮らしの学生の食生活改善のため、学生が市民からレシピを集め、Web 上で公開する。	平成 23 年度に立ち上げた「食育ネット」にヘルシーレシピを掲載
平成 23 年度	創価女子短期大学	E A C H のコール＆レスポンス	ごみ袋や駅などにある周辺案内図に QR コードを添付。市ホームページ内にコメントを記載できるようにする。市内の各大学に「八王子コーナー」を設置するなど。	ごみ・資源情報がより身近なものとなるようごみ袋やチラシへ QR コードを添付
平成 24 年度	創価大学	障がいのある人もない人も共に働ける街、八王子	障害者と中小企業の雇用促進をすることで八王子に共生社会が築かれると考えた。学生がハローワーク等と協力し障害者雇用の企業に訪問。雇用する上での苦労や工夫を特別支援学校や、施設と協力し事例集の編集作成を行う。市はパンフレット作成の資金面での援助とパンフレットの配布等を協力する。	学生が作成した事例集を、障害者福祉課より関係団体への配付
	山野美容芸術短期大学	美容室を拠点とした認知症サポーターネットワークづくりの提案	八王子市でも認知症サポーター事業が進められているが、よりよい地域の力とするためにネットワークが必要である。市内に 176 店舗以上あり、地域の人たちが利用し、認知症のある人とその家族の人たちも、なじみのある美容室を利用する。美容室をネットワークづくりの拠点として役割を担えらと考える。	認知症サポーター養成講座を修了した美容室に、その旨のステッカーを表示すること。

出典：学園都市文化課作成

（２）市制 90 周年特別講座

2006（平成 18）年 9 月 2 日には、八王子市制 90 周年を記念して特別講座「江戸～平成そして未来 八王子」を八王子市学園都市センターイベントホールで行った。

内容は、学長と法政大学社会学部メディア社会学科田中優子教授との対談形式の講座で客席との意見交換も行った。このときは事前申し込み者が多く、会場のイベントホールに入りきれず、別室でメディア視聴という方法もとった。



市制 90 周年特別講座（学園都市大学事務局提供）

（３）「まち」＝「大学」全国サミット in 八王子の開催

全国には、地域と大学との連携によるまちづくりを行っている地域が多くある。こうした地域の「まち」「大学」「住民」「行政」が一堂に会して 21 世紀にふさわしい「まち」と「大学」や学生と住民のかかわり方について協議することを目的にサミットが開催されてきた。

第 1 回山口市、第 2 回庄原市、第 3 回由利本荘市、第 4 回都留市で開催されたが、2008（平成 20）年 10 月第 5 回のサミットを八王子市が八王子市学園都市センターイベントホールにおいて主催した。

共催は八王子商工会議所、八王子市学園都市推進会議、ふれあい財団で、参加者は、都留市、都留文科大学、都留商工会議所、岐阜市、岐阜大学産官学融合センター、山口市、山口商工会議所、山口大学、山口県立大学、山口芸術短期大学、熊本市、東海大学熊本キャンパス、庄原市、県立広島大学、県立広島大学地域連携センター、しょうばら産学官連携推進機構、庄原商工会議所、由利本荘市、善通寺市、高梁商工会議所などである。



「まち」＝「大学」全国サミット（学園都市大学事務局提供）

（４）開学 10 周年特別企画記念講演会の開催

2014（平成 26）年 10 月、学園都市センターイベントホールで八王子学園都市大学開学 10 周年特別企画記念講演会を開催した。

市長の挨拶のあと、法政大学総長田中優子氏から「多摩・八王子から学ぶこと」というテーマで江戸時代の織物産業と八王子、研究・教育の場所としての多摩地域、法政大学と多摩などについて基調講演があった。そのあと「江戸～平成へ 八王子の未来を考える」というテーマで田中優子氏、大学コンソーシアム八王子会長で東京工科大学学長軽部征夫氏に本学学長を加えたトークセッションがあった。

このときも事前申し込み者が多く、会場のイベントホールに入りきれず、別室でメディア視聴という方法をとった。



開学 10 周年特別企画記念講演会（学園都市大学事務局提供）

おわりに ―これからの10年に向けた課題―

これまでの10年は、開学した八王子学園都市大学を安定軌道に乗せるため注意深く微調整を繰り返した時期だった。各大学の全面的な協力のもと、講座数も受講者数も安定して推移し、市民の一定の支持を受けていると理解したい。

大学と地域の融合を目指し、地域の大学と連携して専門的で高度な学習の場を市民に提供するという第一の設置目的についても、八王子に23の大学等が所在するという市の特性を生かして、他の市民大学やカルチャーセンターにはない内容を提供してきたからこそ、有料の講座にこれだけの人を集めてきたといえよう。

結果として、八王子学園都市大学は、全国に例のないユニークな活動をしてきたといえるが、これからの10年に向けた課題は大きく、重い。これからの10年は、内容にさらに磨きをかけていかなければならない。以下、これからの10年に向けた課題のうち主要な点について具体的に触れたい。

(1) 受講者の構成

2014(平成26)年3月1日～7月14日の受講者数によると、市内外区分別申込人数一覧(図表3)では、市内在住者が86.4%、市外在住者が13.6%で、これについての特段の判断基準はないが、ほぼ妥当な数字かと思われる。

男女別申込人数一覧(図表4)を見ると、男性38.6%、女性61.4%と女性の受講者が3分の2近くを占めている。これについても特段の判断基準はなく、現代において女性の学習志向が相対的に強いという傾向を反映しているだけという見方もできるかもしれない。

しかし、年齢層別/男女別申込人数一覧(図表5)を見ると、60歳代が43.5%、70歳代が26.8%、これらに80歳代の4.4%を合わせると受講者全体の74.7%が60歳以上である。

結果として、リタイアした人の受講が多いという見方もできるし、あるいは逆に受講者の4分の1働き盛りあるいは若年層が占めているのだからこれでよしと評価できるかもしれない。

図表3 市内外区分別申込人数一覧

市内外区分	内訳	人数	割合 (市内外)	割合 (全体)	総人数	割合
市内在住	市内在住のみ	667	75.7%	65.4%	881	86.4%
	市内在勤	212	24.1%	20.8%		
	市内在学	2	0.2%	0.2%		
	小計	881	100%	86.4%		
市外在住	市外在住のみ	122	87.8%	12%	139	13.6%
	市外在勤	17	12.2%	1.7%		
	市内在学	0	0%	0%		
	小計	139	100%	13.6%		
合計		1020	—	100%	1020	100%

図表4 男女別申込人数一覧

性別	人数	割合
男	394	38.6%
女	626	61.4%
合計	1020	100%

図表5 市内外区分別申込人数一覧

年齢	性別	人数	割合	総人数	割合
18～29	男	1	0.1%	8	0.8%
	女	7	0.7%		
30～39	男	8	0.8%	41	4%
	女	33	3.2%		
40～49	男	12	1.2%	96	9.4%
	女	84	8.2%		
50～59	男	18	1.8%	113	11.1%
	女	95	9.3%		
60～69	男	195	19.1%	444	43.5%
	女	249	24.4%		
70～79	男	133	13%	273	26.8%
	女	140	13.7%		
80～	男	27	2.6%	45	4.4%
	女	18	1.8%		
合計		1020	100%	1020	100%

出典：いずれも学園都市大学事務局作成

日本が工業化時代を終えて情報化時代に入り、成熟社会を迎えているという一般的な時代背景を考えると、これからは、働きながらリカレント教育を受け、さらに高度専門的な職業上の知識を高めていくという傾向が高まると予想される。

地域の大学と連携して専門的で高度な学習の場を市民に提供するという八王子学園都市大学の設置目的からすると、今後、社会の第一線の勤労者層の学習意欲にどう応えていくか、科目構成や開講時間の設定に一層の工夫と努力が求められている。

（２）受講者に対するフォロー

八王子学園都市大学では、一定の単位を取得した受講者に対して市民学士、市民修士、市民博士という学位称号記を授与している。

称号記授与者数一覧（図表 6）を見ると、2004（平成 26）年前期までに市民学士は 192 人、市民修士は 45 人、市民博士は 14 人となっている。率直に言って、予想以上にリピーターを獲得したということでもある。

称号記授与式における学位取得者の挨拶は誠に立派で傾聴に値する意見が多い。これら市民学位取得者に対するフォローが八王子学園都市大学にとって課題となっている。ゼミナール活動、論文作成、発表会等、相互交流や相互研鑽の機会を増やしていく、あるいは人によっては地域で講師活動を実施するなどが考えられる。

そのためには八王子学園都市大学側でも体制をつくる必要があるが、これまでは、大学の講座を安定軌道に乗せるための微調整に注意を払ってきたというのが実情である。直ちに実現というわけにはいかないが、少し時間をかけてでも取り組んでいきたい課題である。

図表 6 称号記授与者数一覧

年度	称号記授与者		
	博士	修士	学士
16	0	0	0
17	0	0	1
18	0	0	0
19	0	1	7
20	0	0	17
21	2	6	23
22	3	6	14
23	0	3	22
24	5	6	27
25	1	12	49
26	3	11	32
全年度	14	45	192



2014（平成 26）年 10 月 11 日の称号記授与式

（３）地域と大学との一層の融合

先に示した図表 1 に見るように、八王子学園都市大学の教室で開講している科目と、各大学のキャンパスにおいて開講している科目の数は、毎年、ほぼ拮抗している。

受講生にとってみると、八王子学園都市大学の教室で、各大学の先生の授業を受けるのも有意義だし、また、各大学のキャンパスで学生たちと共に、あるいはふだん学生たちが学んでいる教室で受講するのも意義が大きい。

八王子学園都市大学の教室で開講する授業は、学園都市センターのセミナー室数という物理的な制約があってこれ以上増やすのは難しい現状であり、今後、各大学の教室で行っている授業のうち公開科目を増やすことができないかというのが一つの課題である。ただしこれは、各

大学の本来的な教育機能を損なわない範囲で、あるいは各大学の本来的な教育機能にプラスになる方向で実施しなければならず、模索が続いている。

八王子学園都市大学では5年以上続けて講座を提供した先生に感謝状を差しあげている。その数は、図表7に示したとおりである。市民対象の有料の講座では、普通、受講生は数年すると需要が一巡してしまうので5年以上も続けて受講生が集まるというのは、よほどそのテーマと講師に魅力があるということでもある。

ほとんどボランティアで八王子学園都市大学に授業を行っていただいている各大学の先生方や関係者の皆様に改めて感謝しながら、今後のさらなるご協力を心からお願いしたいと思う次第である。

図表7：感謝状贈呈人数一覧

年度	贈呈人数
21	30
22	18
23	18
24	7
25	9
26	12
全年度	94



2014（平成26）年12月7日の感謝状贈呈式

（あおやま やすし・明治大学公共政策大学院教授）